

チェンジエージェントを育てるボランティア活動

フェリス女学院大学ボランティアセンター コーディネーター 上條 直美

大学ボランティアセンターは、大学の理念を体現する場所という独自の存在として設立されているため、各大学で特徴的な進化を遂げている。本稿では、フェリス女学院大学の教育理念“*For Others*”に基づくボランティアセンターの活動を紹介する。特に、単位認定制度とボランティア活動の関連、東日本大震災を機に始められたサマースクールプログラム（保養プログラム）について紹介し、最後に大学ボランティアセンターが現在抱える課題について述べる。

1. “*For Others*”の実践～フェリスの特徴

フェリス女学院大学ボランティアセンターは、フェリス女学院の教育理念である“*For Others*”を体現する場所のひとつとして、2003年に設立された。

学院の沿革に少し触れると、フェリス女学院は1870年に日本で最初の婦人宣教師メアリー・E・キダーによって横浜の外国人居留地で始められた。その背景には当時のアメリカ社会のキリスト教会における女性の社会的活躍の台頭があり、開国したてでまだ女子教育がなされていなかった日本において、ミッション系の女子校が発展したという革新的な歴史がある。“*For Others*”は1923年の関東大震災に際して殉職した三代目校長カイパーが好んで使っていた言葉と伝えられ、聖書に依拠すると、「自分のことばかりでなく他人のことも考えなさい」という言葉になる。フェリスのボランティアの力の源泉といえることができる。

この教育理念を現代の社会の文脈に置き換えると、他者とともにあり、変革を起こし続ける生き方としてのボランティア活動といえることができる。活動を通じて成長する学生一人ひとり、社会の中でチェンジエージェント（自ら変化しつつ、変化の媒介者となること）の役割が期待される。

センターの活動は、大きく分けて学生への「情報提供」「プロジェクト」「学生スタッフの活動」の3つからなる。「プロジェクト」は、地域のニーズや学生の発案から具体的なプログラムとして定着しているものである。その中でも2011年3月11日の東日本大震災を契機として始められた「サマースクールプログラム」について詳

しく後述するが、その前に、フェリスの特徴のひとつである「ボランティア活動科目」について紹介したい。

2. 「ボランティア活動科目」単位認定制度

学生個人の自主性に基づくボランティア活動を大学として積極的にサポートする目的で2003年に「基礎教養科目」として「ボランティア活動科目1・2・3」が導入された。「比較的長期にわたる国内外でのボランティア活動」が対象となり、単発の活動の寄せ集めや学内の活動（バリアフリー推進室の障がい学生支援は除く）は対象外である。

学生が活動を選び計画書を提出する。審査を経た上で活動開始、活動中の詳細な記録とレポートなどの所定の手続きに基づき、単位認定がなされる。活動時間によって単位数も変わる（45時間以上1単位、90時間以上2単位、270時間以上6単位）が、270時間の活動を2年余りをかけてやり遂げた学生の活動記録やレポートは、多くの学びに満ちている。特に毎回の活動記録を、活動内容、感想、課題に分けて振り返る過程で学びの蓄積が見られ、教職課程に在籍する学生などは、子どもたちへの観察眼が深まり、どのような視点で考えていけばよいかということが分かってきた、という感想を述べている。視点を獲得するということは、他のさまざまな場面に応用できる。いわゆる「自分のものの見方」が定まり、考えが深まっていく。また、視点がなければ課題を発見することもできない。問題解決の第一歩は、実は適切な課題の発見であるということ、学生は身をもって体験していく。こうした学生の記録へのフィー

ドバックなどもセンターのコーディネーターの重要な役割である。

次に「サマースクールプログラム」プロジェクトについて紹介する。

3.3.11と保養プログラム「サマプロ」

東日本大震災直後の4月、ある福島県出身のボランティアセンター学生スタッフが、自分の地元である福島の被害、家族、親戚のこと、子どもたちの健康についての不安や考えをボランティアセンターで吐露した。話し合う中で生まれてきたアイデアが、1986年のチェルノブイリ原発事故後、ウクライナ地域の子どもたちを横浜に招いて保養プログラムを行っていたボランティア団体からヒントを得て、同じような活動を横浜でできないか、ということであった。一時的であっても被災地を離れ、不安やストレスから解放されて遊ぶことで子どもたちの免疫力も高まる可能性があることを知り、一時避難・保養プログラム「サマースクールプログラム@横浜」を企画し、実施することとなった。大学の承認を得て、横浜の青少年団体であるYMCAや横浜NGO連絡会のネットワーク、JICA横浜の施設など多くの協力を得た。そして何よりも本プログラムに関心をもった学生スタッフが30名以上集まり、準備を進めた。

実施に至るまでには、東日本大震災関連情報の収集や勉強、助成金や寄付金などの調査、福島県のさまざまなネットワークを通じた参加者募集、フェリスは女子大なので男子参加者のために学外の男性ボランティアの募集などが行われた。

プログラムは毎夏、4～5泊前後の日程で実施され、2016年には第6回目を数えた。対象は小学校5年生から中学3年生までの子どもたちで、ほぼマンツーマンの数の学生スタッフが関わる。これまでに参加した子どもたちは延べ人数で約80名(66家族)、関わった学生は100名を超える。

震災直後の緊迫感は6年目ではだいぶ変化しているが、毎年送り出してくれるご家族からは、「今年になってリフレッシュキャンプ(保養プログラムのこと)の案内が減ってきた」

「フェリスではぜひ続けてほしい」という声も聞かれ、時間の経過とともに状況の変化、風化が感じられる。

一方、企画運営側の学生スタッフは、最初は被災地のために何かしたい、子どもが大好きという純粋な気持ちをもって参加してくる。プログラムを実施して改めてその意義、意味を学び、当事者意識が育まれていくため、単発の参加で終わらせず継続していくことが重要となる。プログラムを始めた頃の切実さが薄れていく中、フェリスとしてこのプログラムをどう位置付けていくかが大きな課題となっている。

4. 今後の課題

最後にボランティアセンターが、学生と社会にとってより意味のある場所となるため、いくつか課題をまとめてみたい。

一つ目は、学生の経験を深化させ、学びに定着していくための振り返りのプロセス支援の強化である。サービスマンニングとしてカリキュラムに組み込む試みが増えているが、ボランティア活動の良さ(学生の自主性)を維持しつつ学びを深めていくにはどうしたらよいかという課題を感じている。

二つ目は、センター全体の評価のしくみである。個別プログラムの評価は容易であるが、センターのミッション、目的、目標に照らし合わせた俯瞰的な評価を実施するしくみを作ることが求められる。

三つ目は、支援者であるコーディネーターの専門職としての確立である。インターンシップなどは教学的な視点から大学教員が関わる場合も多いが、青少年育成の視点は大学の教授のそれとは異なるスキルが求められる。

ボランティアセンターを、社会に出る一歩手前の学生にとって、「サードプレイス」(家庭でも授業でもない、第三の場所)、居心地よい居場所だからこそイノベーティブなアイデアを生み出せる場所として、独自の役割、存在感を進化・深化させていくことに大きな可能性を感じている。